

## 平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書(項目)

学校名	弥富市立弥富北中学校	氏名	須古井京子
-----	------------	----	-------

### 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

#### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

本年度「地球市民になろう！」のテーマで国際理解教育をスタートさせたが、まず自分の目で国際協力の現場を見てみたいと思い、研修に参加した。6月から始まった開発教育指導者研修や、海外研修のための事前研修などJICA中部を訪れる度に、ますます国際理解教育の必要性を痛感すると同時に、まだ見ぬラオスへの想いが膨らんでいった。「アジア最貧国」と言われるラオスだが、「豊かさ」「貧しさ」のとらえ方も、現地に行くことで、新たな発見があるのではないかと思った。そして、実際にラオスでは、豊かな自然と共に暮らす人々の姿に触れ、経済的な物差しだけでは計れない豊かさがあることを、改めて実感した。今後も、多方面で開発が必要なラオスだと思うが、ラオスをもつ「豊かさ」を大切にしていくことも共に考えていく課題と言える。授業では、ラオスに限らず、開発教育に関わるさまざまな課題を、ひとつひとつ子どもたちと一緒に考えていけるような参加型授業を展開していきたい。

### 2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

#### (1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ラオスでは人の居るところ、いつも「サバイディ(おはよう、こんにちは、こんばんは)」の音が響き合っている。丁寧なときは、胸の前で両の掌を合わせ、相手の目を見て「サバイディ」と微笑む。小さな子どもたちも、初対面のわたしたちに、常に優しい笑顔で「サバイディ」と言って掌を合わせてくれた。挨拶の大切さは日本でもよく言われることだが、「サバイディ」のラオス式挨拶に、どれだけ清々しい気持ちになり、心が癒やされたかしのれない。挨拶のもつ大きな力を、ラオスに来てすぐに再認識することができた。

また、子どもから大人まで、多くのラオス人の「大切なもの」が「家族」であることに驚かされた。ラオスの人々の「家族」を大切に思う気持ちに、改めて自分も家族の存在に気づかされた。そして、家族だけでなく、地域や社会の中で、「子どもとお年寄りを特に大切にします。」と言う話も聞き、人との関わりが温かいと感じた。共に生きる中で、互いに見守る、助けるという気持ちをもって生活している姿に共感した。

#### (2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

当たり前の事だが、何よりアジア人として、まず風貌がよく似ている。ラオスの街の中で、ラオス人と日本人をきっちり見分けることは難しいと思った。今回お世話になったガイドさんは、大学時代のサッカー部の友人に瓜二つでびっくりしたほどである。多くのラオスの子どもたちにたくさん出会ったが、「この子はうちの学校のあの子に似ているなあ。」と心の中でそっくりさん探しをしていた。

訪問地でお会いする人々の多くは、初めは皆どことなく恥ずかしそうにしている。初対面で自分をどんどんアピールするという人はとても少なかった。短期大学での授業の様子や、子どもセンターでのパフォーマンス

の様子からも、恥ずかしそうに発言したり、演技りする姿を何度か見かけた。こちらがカメラを向けて、「写真撮っていいですか？」と尋ねて初めて、カメラに笑顔を向けてくれることが多かった。人前に立つことや、自分をアピールすることに少し控えめなところが、日本人に近い印象を受けた。現地で働く方々が「日本人とよく似ている点があります。」とおっしゃっていたが、そのひとつに挙げられるかもしれない。

### **(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から**

生活廃棄物に対する取り組みの一部を見学させていただいたが、自分が住んでいる名古屋市で20数年ほど前に、ゴミ削減のための改革が行われたので、その時のことを思い出した。今でこそ、ゴミの分別が当たり前という日本だが、わたしが子どもの頃は、ゴミは何でも捨て放題で、紙ゴミの量は文化のバロメーターだと思っていた時代があった。環境問題は、どこの国でも地域住民への啓発と共に、意識改革がとても必要なので、ここでも教育の力が不可欠だと痛感した。

また、福祉への取り組みとしては、障害者活動を支援する会の活動に触れることができた。日本では全国どここの自治体にも福祉センター等があり、障害者雇用も法律で定められているなど、整備されている点もある。が、障害者に対する差別や偏見などは、国の対策が整っていないラオスと比べてどうなんだろうかと、疑問に思った。両国とも、障害をもった人たちとの共生ができていく社会になるために、互いのよい面を学んでいけたらよいと思った。

## **3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」**

滞在期間中に、多くのJICAの国際協力事業を行っている方々に直接お話を伺うことができたが、皆さんおっしゃっていたことは、「その国にあった支援のあり方で、その国の人々が必要としている支援を。」であった。金品だけの支援ではなく、いつかはラオスの人々が、支援の手が必要でなくなることを想定しながらの、自立に向けた支援をしているところが素晴らしいと思った。そして、皆さん一様に「ラオスはとてもよい国です。どうぞ日本に帰ったら、ラオスの事をたくさん子どもたちに話してやって下さい。」と言われた。支援する国を、その国の人々を、まず好きになることが一番大切なことだと感じた。事業を進めていく上で、たくさんの困難や苦勞を抱えながらも、その国の人たちと生活を共にしながら、努力を続けておられる皆さんの姿はとてもまぶしくて、日本人として誇らしかった。日本国内でも、JICAのこのような活動がより多くの人々に知ってもらえるといいと思った。

「今後あるといいなと思う視点」ではないが、家族全員（例えば、おばあちゃんがシニア海外ボランティア、父さんが青年海外協力隊）でとか、夫婦で青年海外協力隊とか、家族単位で支援国に住みながら活動をするというのはどうでしょう。もう、実現しているかもしれないが。

## **4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」**

### **③ 不発弾除去に関する研修運営能力強化/UXO Lao**

恥ずかしい話だが、わたしは地雷と不発弾の違いさえも知らないで、UXO Laoを訪問した。林専門家は、

そんなわたしにも、大変わかりやすい資料映像や DVD などプレゼンをして下さった。「ラオスの不発弾 (UXO) の現状と課題」と題した資料を丁寧に説明していただいた。ラオスはクラスター爆弾の被害が世界一多い国だと言うことや、日本は被害者であり、加害者でもあり、そして支援者でもある。と言う事実も初めて理解することができた。最後に、不発弾による危険回避の啓発 DVD を見せていただき、感動したメンバーが、「この DVD を、わたしたちもぜひ授業で使いたいのですが。」と申し出ると、林専門家は快く承諾して下さいました。そして何とラオスにいる間に、これらの資料が全て入った DVD を、メンバー全員に作成して下さいました。素晴らしい教材をいただいたので、帰国してすぐに職場の先生方にも見せた。この教材資料を使ってどんな授業展開ができるのか、とても楽しみである。(須古井京子)

## ⑪ 青年海外協力隊との懇親会

北部のサヤブリー県の小さな町で活躍されている、福嶋さん (ナース)、本間さん (バレーボール指導)、田口さん (環境教育) の3人に、ルアンプラバンからサヤブリーに来ていた中山さん (環境教育) も加わって下さり、4人の青年海外協力隊の方々との賑やかな懇親会となった。現地ではよく一緒に過ごしていらっしゃるとのことで、明るく元気な仲良し四姉妹の様だった。「互いの職場でつらいことや、腹が立つことがあっても、互いに愚痴を言い合えるので、発散できます。」と笑顔で話してくれた。懇親会前に、本間さんは、「みなさんに食べてもらおうと思って、買ってきました。」と言って、うれしそうにビニール袋を抱えて登場。店について、お皿にどっさり盛られたそれは、どっからどう見てもコオロギ。「なるほどそういうことか。」と、彼女たちが何事にもチャレンジ精神を忘れず (?) 現地で暮らしている様子が想像できた。大量のコオロギに一瞬ひるんだが、数分後には、ほとんどの人が、「ビールつまみにナイス！」とか「土産に買って帰りたい。」と言っていた。結局わたしも、100匹ほどいただいた。(須古井京子)

## ⑫ 青年海外協力隊 (バレーボール) 活動

青年海外協力隊の本間さんが指導するチームの15歳から18歳までの男女20数名との交流活動をした。体育館に入ると、日本語で「おはようございます！」と一斉に元気な挨拶で出迎えてくれた。本間さんの指導も2年目に入り、チームとしての規律やマナーなどがチームの中によく浸透してきたということだった。体育館の壁にはチームの約束事が箇条書きで貼ってあった。生徒たちと一緒に考えたものだそう。何をすることも、押しつけるのではなく、なぜそうすることが必要なかを生徒たちに説明したり、より良い方法を考えさせたりしながら指導に当たっているとのことだった。練習の様子や、わたしたちとの交流の様子からも、チームとしてのまとまりを感じた。バレーボールの技能だけを教えるのではなく、スポーツを通して、チームワークの大切さ、規範意識や物事に取り組む姿勢など、熱心に指導されていることがひとりひとりの生徒たちから伝わってきた。ラオスの未来を担う青少年の心と体の育成に大きく貢献している活動だと実感した。2年間の任期を、バレーボール大会のために延長したという本間さんに、子どもたちへの情熱と愛情を感じた。(須古井京子)

## ⑬ 学校図書室の地域への展開事業 / NPO 法人ラオスの子ども ALC

子どもセンター長のシータン先生の自宅に併設してある図書室を見学したあと、子どもセンターで30名程の子どもたちとの交流を行った。ラオスでは、学校の授業で情操教育がほとんどなされていないので、このような地域の子どもセンターで、音楽や舞踊、読書、織物などの活動をしているとのことだった。「以前の村の子どもたちは、人前で何かを発表することなどできなかったが、この子どもセンターでいろいろなことを経験することで、できるようになってきた。」とシータン先生がおっしゃる通り、踊りや劇を堂々と披露してくれた。

日本の文化や遊びを紹介しようと、わたしたちのグループは、お絵かき歌、エコバック作り、折り紙などをした。手先を使う遊びでは、すぐに覚える器用な子どもがいたが、その中になかなかできない男の子がいた。が、最後の剣玉では、見事にやり方を覚えて一番上手になり、多くの歓声を浴びながら、生き生きと活動していた。教育の現場で、子どもの可能性を考えると、いろいろなことにチャレンジできる選択肢があるのは大切なことだと改めて思った。(須古井京子)

## ⑫ JICAラオス事務所報告会

ラオス研修の10日間を振り返った。出席して下さった木村次長さんから、「百聞は一見にしかずと言いますので、実際に現地を見たことで理解を深めてもらったと思います。みなさんから、ラオスが好きになりました。と言ってもらえて嬉しいです。生徒たちに、ラオスの話をたくさんして下さい。」とのお言葉をいただいたが、ラオスチーム全員が大きくなっていた。(と思う。)

出発前にみんなでリストアップした「ラオスで私たちが担うミッション10」を、自分はいくつ達成できたろうかと考えていた。①のラオスの全てを五感で体験する。(特に味覚!)と、⑩の無事帰国。の二つはやり遂げた自信があるが、他のミッションについては心許ない部分もある。しかし、私自身の達成度は低かったが、チームワーク抜群のラオスチームなので、きっとメンバーの足りない部分は、いつもの「共有」をしてくれるものと信じている。そして、今後もラオスとの関わりを持ち続けることで、その全てのミッションをいつか達成したいと考えている。(須古井京子)

## ● その他印象に残ったエピソード ( サバイディ コイスー スコイ )

「私の名前は〇〇です。」というラオス語は、「コイスー 〇〇」または「スーコイ メーン 〇〇」というらしいぞ。と事前にネットで調べてわかった。私の名前は須古井(スコイ)なので、「これは面白い。ぜひ現地で使ってみよう。」と楽しみにしていた。訪問地では、自己紹介することが多かったため、全員がこの「コイスー〇〇」のフレーズを使って挨拶していた。わたしも自慢気に「スーコイ メーン スーコイ!」を連呼していた。結構ラオス人にうけていた(ような気がする)。ガイドのトンワンさんにも「あれはよかった。」と褒めてもらった。

## 5. 印象に残る写真2点 とその解説

### ●写真1…ファイル名 [BAN\_1159]

◇キャプション： 6年後に東京で会いたいなあ！

◇解説文：

サヤブリー県で本間さんが指導されているバレーボールチームの子どもたち（15歳～18歳）と国際親善試合（？）を行った。チームの中には国の代表選手候補も数名いました。オリンピック選手になって、東京で再会できたら素敵！



### ●写真2…ファイル名 [MTM\_2316]

◇キャプション： 今日も、お兄ちゃんと一緒に

◇解説文：

少数民族の村で出会った兄弟。弟が持っているおもちゃの車もお兄ちゃんの手作りかな。ラオスの村では、小さな弟や妹を、こうして抱っこしてあやしている姿をよく見かけました。日本でも、昔はよく見かけた光景かも。



## 6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・昨年も書かれていましたが、暑い国なら、衣類は4、5日分を持参し、あとはホテルでまめに洗濯します。また、立派なホテルなら、ランドリーサービスを利用できます。
- ・暑い国でも、冷房が効き過ぎて寒い時のために、特に女性はカーディガンなどがあるとよいです。また、長袖のシャツなども結構便利です。自分で洗濯することを考え、薄手の物の方がよいです。
- ・針金状の軽いハンガーを数本持って行くと、洗濯時に便利です。
- ・暑い国なら、UV対策は必要です。（長袖、帽子、日焼け止め）また、虫除けグッズも必須です。
- ・やっぱり、疲労がたまりやすくなります。自分にあつた医薬品の他に、滋養強壮剤、栄養ドリンクなども役に立ちます。自分がなくても、メンバーにあげることもできますし。
- ・訪問地で渡すお土産（みんなで準備したもの）以外に、お世話になった方にお礼として、さっと渡せるようなちょっとした日本のものがあると良いと思います。日本の方には、小袋のお菓子、あめなど。現地の方には、和風ハンカチ、折り紙など。
- ・飲料水等は現地ですでにたくさん準備していただけるので、必要ありませんでした。
- ・日本食が恋しくなる場合のために、梅干し、酢こんぶ、カップヌードルなどを準備し、食べなかつたら、青年海外協力隊の方にお裾分けすると、喜んでいただけるのでは。
- ・何と言っても、10日間の研修をこなせる健康な心と体が必要です。心の面では、仲間と助け合いながら楽しく過ごそうという前向きな気持ち、体の面では無理をせず、日本で生活しているときの8割くらいの馬力出力がよいと思います。体力面で全力出し切ると翌日がつらいかも。
- ・2日目くらいまでに、一日の研修の流れをつかむと後は慣れてきます。一日の振り返りをイメージして、訪

現地では自分にできる学びをしてきましょう。

- ・「1から10まで漏れなく。」と思っても、なかなか難しいので、「気づき」「疑問」「発見」など、自分なりにポイントを絞っていくと印象に残ります。
- ・わたしは現地の言葉を、事前学習する時間がありませんでした。そのため、使えそうな単語やフレーズを2, 30個選び、マナビノオトに挟んでいきましたが、それだけでも結構役に立ちました。
- ・現地の言葉としては、良く言われることですが、あいさつは必ず覚えましょう。現地に行ってからでも間に合います。特に、子どもたちとの交流で使えそうな短い文を覚えておくと良いと思います。しかし、質問文はしゃべっても相手の返事の内容がわからないので会話は成立しにくいですが。
- ・現地のガイドさんや通訳さんと、できるだけ交流しましょう。いろいろな情報が聞けて面白いです。

## 7. その他全般を通じての感想・意見など

同行して下さったJICA中部の酒井さん、NIED・国際理解教育センターの伴さん、研修の教師の方々、現地ガイドさん、通訳さん総勢13名でのラオスの10日間は、学びを深める充実の研修だったと実感しています。わたしたちの研修のために現地でお世話になった方々からも多くのことを教えていただきました。多くのミッションを背負いながらも、いつでもどこでも明るく楽しいムードを忘れず、互いをサポートし合った仲間たちに、感謝の気持ちでいっぱいです。コプチャイ ライライ！！

以上